

大阪大、間質性肺炎の進行性を予測するバイオマーカーを血中エクソソームの解析により同定

📄 1pt 🕒 3分

2024.06.12 山地紀香

   
シェア シェア 送る 送る

 この記事を印刷する

大阪大学大学院医学系研究科呼吸器・免疫内科学の榎本貴俊氏（博士後期課程）、武田吉人准教授らの研究グループは、血中の細胞外小胞（エクソソーム）の解析により、間質性肺炎の進行性を予測する新規バイオマーカーとして肺サーファクタント蛋白B（SP-B）を同定したと発表した。進行性の間質性肺炎を早期に同定することが可能で、早期の治療介入による予後の改善が期待されるという。論文は2024年6月11日、JCI insight誌にオンライン掲載された。

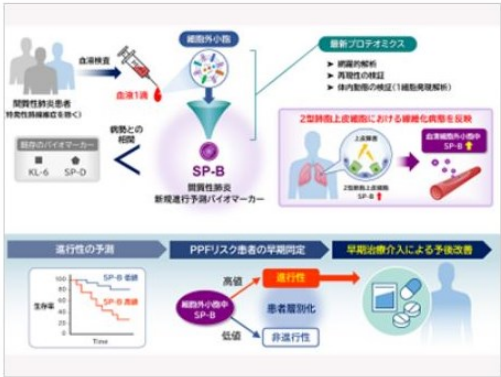


医療NEWS

QLifePro

線維化進行早期予測は困難、バイオマーカー開発が喫緊の課題

大阪大学は6月11日、間質性肺炎において、進行性の予測に有用な新規バイオマーカーとして肺サーファクタントタンパク質B（SP-B）を同定したと発表した。この研究は、同大学院医学系研究科呼吸器・免疫内科学の榎本貴俊博士後期課程、白井雄也助教、武田吉人准教授、熊ノ郷淳 教授（呼吸器・免疫内科学／WPI-IFReC感染病態）らの研究グループによるもの。研究成果は、「JCI Insight」に掲載されている。



画像はリリースより
（詳細は▼関連リンクからご確認ください）

間質性肺炎は、肺に不可逆的な線維化を呈する難病で、2022年には日本の死因第11位と報告されている。近年、抗線維化薬の有効性が示されているものの、一度生じた肺線維化を正常に戻すことは難しく、進行を抑えるために早期治療介入が望まれている。一方で、線維化が進行する速度は個人差が大きく、進行の速い患者を早期に予測することは困難だ。さらに、進行性の肺線維化を伴う間質性肺炎を総称する新たな疾患概念としてProgressive pulmonary fibrosis（PPF）が提唱され、線維化進